

質問番号：①

質疑応答書

科目名：図書館の組織運営と人事管理

講師名：嶋田 学

質問

ご講義拝聴いたしました。ありがとうございました。
講義で使用されたスライドを参考にいただけますでしょうか。メモを取る時間が、特に後半ありませんでした。
ご検討いただければ幸いです。

回答

事務局を通して、PDFにてご提供させていただきます。

質問番号：②

質疑応答書

科目名：図書館の組織運営と人事管理

講師名：嶋田 学

質問

講義要綱と板書の異なる部分について、書き取りが追いつきませんでした。当日投映したレジユメも、可能でしたらご提供いただきたいです。よろしくお願いいたします。

回答

事務局を通して、PDFにてご提供させていただきます。

質疑応答書

科目名：図書館の組織運営と人事管理

講師名：嶋田 学

質問

主題分類担当分けについて

- ・ 0～9の10部門に1名ずつ配置すべきか、2～3部門まとめて数名では、専門性が薄れるか。
- ・ また、例えば10名が1部門担当した時、全体の蔵書バランスはどうとすべきか。
- ・ 各部門の選書眼を高めるために有効な手段は何か。

回答

貴館の職員数にもよるかと思いますが、各類に1人ずつ担当者を置くことで専門性を深めることが出来る反面、それぞれの職員が広く資料の主題についてかかわる接点を相対的に減らす可能性も否定できません。

その打開策としては、

- ①複数分類を担当する
- ②主担と副担とを決めて、複数の主題に関われる分担をする（責任度に濃淡をつける）
- ③交代期間を短めに設定する
- ④主担当を持ちつつ、全員が全主題についての関心を払うよう意識づける

などが考えられるかと思います。

また、開架の棚管理（選書、配架、書架整頓、面出し、書庫入れ、除籍等）を分担はするものの、選書は、分担の主題だけでなく、全般について着眼、検討し、選定にかかわることも重要な観点かと思います。

選書眼を高めるには、個々の努力だけでなく、選書会議などで、それぞれの職員が「なぜ、その資料を選定したか」の理由を共有することで、お互いの資料への知識から学ぶという事も重要かと思います。

また、出来るだけ「現物」を観る努力（書店通い）、書評を読み、他者の著作物への着眼点から学ぶということも重要かと思います。

質疑応答書

科目名：図書館の組織運営と人事管理

講師名：嶋田 学

質問

講義を通じ、我々新任の館長へ伝えようとして下さった情熱に深く感謝します。先生にご質問ですが、その情熱、心意気をどのように維持・向上されお仕事に日々向かわれておりますでしょうか？（お恥ずかしながら、私はまだまだ未熟者で、なかなかモチベーションが一定に保てるどころまでゆけておらず、お教えいただけましたら幸いです。）

回答

図書館の使命、機能をよく知ることから、その社会的意義と、それが自分にとっても重要な要素であることを認識するところからスタートし、そして、その仕事に関わっていることの意味を問うようにしています。

例えば、図書館で出会う1冊の本が、人それぞれの人生に重要な意味をなすことがままあるという事実です。

移動図書館で巡回しているときに、ある高齢者が「脊柱管狭窄症」と書いたメモを持ってきて、「私の友だちはこの病気を薬で治してもらったが、私は医師から手術しないと治らないといわれた。だが、その説明がどうしても納得できないので、何か分かる本はないか」というのです。その人にとっては、なんとでも手術を避けたいという藁をもすがる思いだったんでしょう。後日、ある資料を届けて、ご本人は「どうやら私は手術をしないといけないようだ」と、納得をされました。

また、ある夏休みの午後、きれいな羽虫をカゴに入れた小学生が「おじさん、この虫なんていう名前」と図書館に駆け込んできました。私は、図鑑を使って、その虫の名前を一緒に探しました。次の日、同じ子どもたちが小さな水槽に入った魚を持ってきて「おじさん、魚の図鑑ある？」と尋ねたのです。ここでは、「人に教えてもらう」という受動的な行動が、「自分で調べる」という能動的な行動に変容しています。

図書館とは、このような人の情念とか理性とかに働きかけて、あるいは自分自身の行為によって、実際の行動に変化を及ぼす、人が生きる上でもっとも人間らしい「思考する」ということを動機付け、育む場所なんですね。

もちろん、そうした機能だけでなく、1人でくつろいだり、美術書を見て潤いを感じたり、人と出会って元気をもらったり、図書館の講演会で新たな知見に出合ったり、いろいろな刺激、あるいは静寂をもたたえる施設です。

そのような人間にとって大切な「心のありか」をみつけるという意味でも、文化と教育の情操を高めるという面でも、図書館は、色々な可能性と責任を有していると思います。

そうした使命と機能に、自分が少しでも役立ちたい、と願う心が、仕事への意欲、モチベーションの発露となっています。